

地域の建築に学ぶ

富田 眞二
(有)富田建築設計室



はじめに

生まれ故郷の徳島に帰ってから、ちょうど30年が経ち、還暦を迎える年になりました。徳島で3年間お世話になった森田建築設計事務所から独立したのが33の年ですから開設27年目になります。当時、医院建築で評判の高かった事務所での修行は結構厳しかったのですが、こうして今があるのは森田所長のお陰だと感謝しています。

地域の建築に学ぶ

独立後まもなく地域の建築に学ぼうと、同世代の建築仲間がつくる「阿波のまちなみ研究会」に入り、町並みや民家・社寺建築などを調査することになります。今は亡き四宮照義先生（徳島県立工業高校教諭）の指導の下、10数年間、調査に参加してきました。先生からは地域の造り方の特徴や独自の部位の呼び名など、雑学も含め、多くのことを教えていただきました。

徳島は民家の宝庫といわれています。藍屋敷の田中家住宅や塩屋敷の福永家住宅のように文化財になっているものも多く残されていますが、我々の調査はこれらとは別で無名の建築に目を向けることでした。そこでこころ惹かれる建築との出会いが訪れることになります。

その一つが県南の漁村集落の「ミセ造りの町並み」です。ミセ造りは雨戸と縁台を兼ねた板戸のようなも



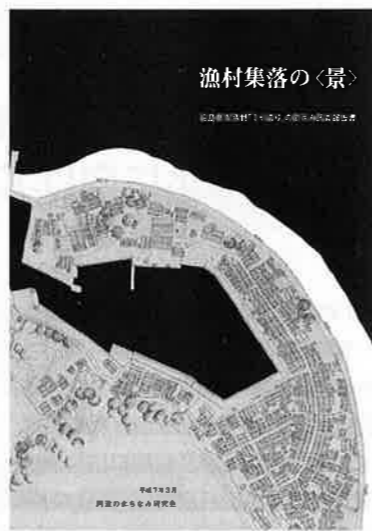
右上：川俣農村舞台

右下：「漁村集落の<景>」

ので、普段は脚を立てて縁台として使われていますが、跳ね上げた状態では雨戸に早変わりします。漁村の民家は間口が狭く奥に長いので、中央の部屋への採光や通風には工夫がいくところ。跳ね上げ式の上下に開く雨戸は、戸袋スペースが要らないので、間口一杯の開口を確保することで、上下の板戸は丁番で取り付けられているので、台風襲来時に、風圧によって外れたり、飛ばされることがありません。ミセ造りの下側の縁台になる部分は、京都に見られる「揚げ見世」と同じ形のもので、いつの時代にかこの地に伝わり、台風常襲地の風土に合わせて造り変えられていったのだと聞いています。

両手を伸ばせば届くほどの狭い通りに向かい合う縁台は語らいの場となり、コミュニケーション装置としての重要な役割を担っているように見えます。軒を寄せ合って生きるミセ造りの町並みに、家づくり本来のあり方を教えられました。

一方、剣山南側的那賀川流域沿いには、人形芝居（浄瑠璃）を演じるための舞台が神社境内に数多く残されています。藩政時代、阿波蜂須賀公の支配下にあった淡路島で生まれた人形芝居は阿波の民俗芸能としていまも多くの人に愛されています。江戸時代から戦前にかけて、村人たちの最大の娯楽であった人形芝居は、県下のいたるところで上演されていました。神への感謝の気持ち



込めて、村人自らが人形を操り楽しんだ。そのほとんどの舞台は村人が総出て築き上げたもので、素朴なつくりの建物になっています。しかし、その多くは使われることなく、崩壊寸前の状態でした。

調査資料をまとめ出版物として残そうと、ソフト面の話を入形座に聞きに出かけた時、我々の調査内容にいたく感動して下さった人形座の全面協力の中、平成3年11月3日、川俣の農村舞台で40年ぶりに人形芝居の復活公演をすることができました。あれから17年、もう遠い昔になってしまいましたが、あの時の感動は生涯忘れることはありません。

それともう一つ、ユニークな出会いがあります。これは個人的な趣味の話なのかも知れませんが、石の建築です。

吉野川を渡れば段々畑や棚田など、村人が築き上げた石積み文化に出会いますが、そんな中で二つの石積みの倉を見つけました。その一つ着藤家の石倉は特にユニークで、壁が上に行くほど広がる逆八の字型をしていて、重くて硬い石を垂直に積むことすら難しいのに上に行くほど厚く積むのは至難の業です。新しい造形を追い求める匠の血が騒いだのでしょうか、石の持つたくましさや今にも崩れ落ちそうなのはかなざとの共存が、この倉をより魅力的なものにしていました。自然石と向き合い、何年もかけてコツコツと積み上げた石工の想いが時を越えて聞こえてきそうです。

また、野面積みの社殿が山里に2棟残されていましたが、平たく割れる青石をただひたすら積み上げている形に、氏子たちの崇拝心がにじみ出ているかのようです。

石積みの風景はただ見ているだけで郷愁を誘い、こころ癒されます。この技術をいつまでも絶やさなくて欲しいものです。

「ミセづくりの町並み（漁村集落の景）」と「阿波の農村舞台」は阿波のまちなみ研究会メンバーと、「吉野川流域に残る石造文化」は野々瀬支部長と一緒にまとめ書物にしました。

内容は未熟なものですが、40歳代の足跡です。残してよかったと思います。



最近の徳島地域会

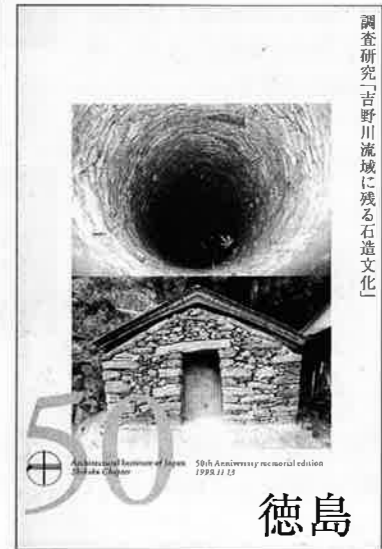
JIA四国支部、野々瀬支部長のお膝元である徳島地域会はこの3年ほどで会員がほぼ倍増し、活動範囲を大きく広げています。若手メンバーでつくる「公共建築学団」は地域社会に貢献できることを見つけ出し、積極的に働きかけています。パラソル屋台の提案と設計協力、サーファーのためのシャワー施設など、建築家として協力できることを押し進めています。

また、会員間の作品見学会も盛んに行われ、技術の向上や親睦に大いに役立っているようです。
(公共建築学団
<http://prbs.exblog.jp/8184365/>)

私も調査や報告書の作成に奮闘したのが40歳代の時でした。あの頃が心身ともに最も充実した時期だったように思います。ここ5、6年は一度も調査に参加できておらず、「阿波のまちなみ研究会」の落ちこぼれになってしまいました。

JIAも支部事務局長を仰せつかりながら、任務を全うできておらず、若手メンバーに助けられながらやっているのが現状です。

彼らの社会活動や能力向上に少しでも協力できるよう、体力を鍛え直すのが緊急課題のようです。



調査研究「吉野川流域に残る石造文化」

徳島

上：「阿波の農村舞台」

下：日本建築学会調査報告書「吉野川流域に残る石造文化」

左下：着藤家の石倉

富田 眞二 (とみた しんじ)
有限会社 富田建築設計室 所長

- ◆経歴
 - 1948年 徳島県那賀町生まれ
 - 1973年 日本大学生産工学部建築工学科卒業
 - 1973年 永大産業(株)入社【大阪市】
 - 一時、渡辺優デザイン事務所出向(東京都)
 - 1979年 森田建築設計事務所入社(徳島市)
 - 1982年 富田建築設計室設立
 - 2003年 有限会社富田建築設計室に改組
 - 1995~2006年 穴吹カレッジ非常勤講師

- ◆受賞歴【受賞作品】
 - 1987年 徳島県優秀建築設計コンクール優秀賞受賞【Y電機相生森林公園工場&保養センターN社】
 - 1991年 徳島県優秀建築設計コンクール優秀賞受賞【高島の家】
 - 1993年 徳島市街づくりデザイン賞優秀賞受賞【富吉の家】
 - 1993年 徳島県出版文化賞受賞【阿波の農村舞台(共著)】